

審査講評 日本水大賞委員会 審査部会長 山岸 哲

昨年の国際コンペでの実績と本年の応募状況日本水大賞審査部会より今回の応募状況並びに審査・選考の経緯について審査部会を代表してご報告申し上げます。当審査部会は「日本水大賞」を選考するために、水環境・水資源・水文化・水防災等の分野の学識経験者16名で構成されています。審査は募集要項に明記された「日本水大賞の対象範囲」及び「審査基準」を基に進められました。候補となった各活動は、顕彰制度委員会に報告され、審議に付されて、最終的に日本水大賞及び各賞が決定したものです。

応募状況：

今回の応募総数は238件で、前回より30件以上増加し、内容的には優れたものが多く、審査には大変頭を痛めました。地域別では、鳥取県を除く46都道府県からの応募があり、全国的な関心を持たれている表彰制度となっていることが分ります。活動主体別については、団体、学校の二つの活動主体が増加していますが、個人、企業での退潮の様子が見られたことは残念でした。活動分野別では、昨年度と同様に、水環境にかかわる件数が多く半分以上を占めていました。続いて、水文化、水資源、水防災の順となっていました。

審査結果：

本年度の日本水大賞・グランプリの榮譽に輝いたのは、滋賀県「水と文化研究会」の活動で「見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試み」です。琵琶湖周辺の地域住民と研究者が行っている15年にわたる活動であり、地域住民の関心、参加を促す工夫と努力が高く評価されました。

国土交通大臣賞には、岩手県「北上川流域市町村連携協議会」による、「県境を越えた「北上川自然環境園」づくりへの挑戦」の活動が選ばれました。北上川自然環境園の地域づくりのために、自分の地域（市町村）を越えた雄大な取り組みが高く評価されました。

環境大臣賞には、東京都「葛飾区立水元中学校環境科学部」による、「都立水元公園にパトローネ利用した実験場を創り水質浄化する活動」が選ばれました。中学生が身近な素材を活かし、実際に効果を上げている点が高く評価されました。

厚生労働大臣賞には、東京都「(財)とうきゅう環境浄化財団」による、「多摩川およびその流域の環境浄化の促進」の活動が選ばれました。創立以来30年を越え、多摩川流域に特化した多くの有益な活動を助成し続け、財団自ら季刊誌を発刊して情報を発信してきた工夫と努力が高く評価されました。

農林水産大臣賞には、栃木県「那須野ヶ原土地改良区連合」による、「21世紀土地改良区創造運動」の活動が選ばれました。組織的に展開され、継続性もあり、用水の持つ多面的な機能がバランスよく発揮された活動であり、他の地域の模範となる活動であると高く評価されました。

文部科学大臣奨励賞には、宮城県「気仙沼市立面瀬小学校」による、「豊かな水辺環境を守る心を、世界と分かち合う国際環境教育」が選ばれました。全学年を挙げての計画的な年次進行による取り組みであり、教育効果も大きく、国際性も高いことが評価されました。

市民活動賞には、熊本県「特定非営利活動法人天明水の会」による、「広げよう緑の仲間たち～子供たちと私たちの明日のために」の活動が選ばれました。森の再生と海の回復を結びつける先駆的団体が、地域、行政、学校を巻き込んで多様な活動を展開した点が高く評価されました。

国際貢献賞には、新潟県「国立大学法人長岡技術科学大学環境・建設系水環境研究室」による「途上国に適用可能な下水処理技術の現地一体型国際共同開発」の活動が選ばれました。低コストの浄化方式が不可欠である、発展途上国の下水処理システムを実用化させた功績は大きいと評価されました。

奨励賞としては①宮城県「みやぎ生活協同組合」による「五感を使った「水辺の観察と水質測定」

活動の広がり」、②山形県「特定非営利活動法人パートナーシップオフィス」による「水辺の散乱ゴミ指標化をはじめとする川、海、島におけるクリーンアップ活動等」、③福井県「田倉川と暮らしの会」による「アカタン防砂フィールド・ミュージアムづくり」、④島根県「特定非営利活動法人斐伊川流域環境ネットワーク」による「宍道湖ヨシ（葦）再生プロジェクト」、以上4件が決まりました。

審査部会特別賞は、①岡山県「就実高等学校放送文化部」による「昭和9年の室戸台風による洪水時の最高水位標識の保存運動」、②東京都「全国管工事業協同組合連合会青年部協議会」による「水源地をきれいにするキャンペーン」&「エコクラブ探検隊」、以上2件に決まりました。例年より特別賞が1件多かったのは、水に関わる多様な活動の盛り上がりの意義を積極的に認めたものであります。

以上が受賞活動についての感想ですが、今年も審査を通じて痛感した事は、水を利用し、守るために全国各地において実は大勢の方々が地道な努力を重ねておられることです。皆様方のご努力にあらためて敬意を表し、講評といたします。

審査講評 日本ストックホルム青少年水大賞審査部会長 千賀裕太郎

昨年の国際コンペでの実績と今年の応募状況

昨年「日本水大賞」と「青少年研究活動賞」（今回より日本ストックホルム青少年水大賞と改称）をダブル受賞した「沖縄県立宮古農林高等学校環境班」の3名が、2004年8月スウェーデンで開催されたストックホルム青少年水大賞国際コンペに25カ国から参加した代表に混じって参加し、厳しい審査を経て堂々グランプリを受賞するという快挙を成し遂げました。本賞創設からわずか3年目で、アジア初の世界トップを射止めた日本の高校生の水への関心の強さと研究レベルの高さを、改めて確認してください。

さて、昨年の実績の影響もあって、今年は昨年（15件）を上回る全国から21件の応募がありました。いずれも高校生らしい、身近な水環境・水資源を対象とした力作ぞろいの自主研究でした。審査員は、ストックホルム青少年水大賞国際コンペでの連続グランプリを狙って、慎重な審議を行いました。

審査経緯：

審査は、水部門の専門家5人からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞国際コンペ審査基準に従って、厳正に行われました。この基準は、関連性（水環境がかかえる重要な問題に取り組んでいるか）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性がみられるか等）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか等）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、適切な情報源、用語の理解）、および実際の技術（生徒自ら測定したか、実験機材・展示事物等の作成を行ったか等）の5項目からなり、審査員がそれぞれの専門的見地から行った審査の結果を持ち寄って慎重に審議して授賞案を選考し、これをもとに日本水大賞委員会において入賞が最終決定されたものです。

審査結果：

日本ストックホルム青少年水大賞に輝いたのは、北海道札幌拓北高等学校理科研究部（代表：3年山上佳祐君）の「沼地の富栄養化による植生の遷移とトンボ相の変化—人為的に造られた自然の多様性を維持するために—」です。大都市の新興住宅地に造成された自然において、長期14年間にわたる動植物や水質調査による自然遷移の詳細な実態把握の裏づけのもと、市民への啓発活動を積極的に行って、さらなる都市化による沼地の富栄養化の影響から守って自然の多様性を高める活動を、高校生・市民・行政の協働により作り上げ、着実な成果をあげていることが評価されました。手付かずの自然の保護はもちろん大切ですが、都市化が進んだ国では二次的な自然も貴重な生態系です。ストックホルム青少年水大賞国際コンペにおいても、このような条件にある都市的な地域における自然保護の積極的なあり方を提示すれば、日本代表の連続グランプリ受賞も決して夢ではないと心より期待しております。

審査部会特別賞として埼玉県にある早稲田大学本庄高等学院（代表：3年坂本広樹君）の「鉄バクテリアの作る沈殿物の工業化の可能性」を選びました。市内を流れる赤色をおびた小川の存在に興味を持ち、この川の水を分析してある種のバクテリアが鉄を体に吸着していることを確認しました。こうした微生物を利用した水の除鉄技術はすでに開発され上水道等に利用されていますが、この鉄バクテリアを製鉄の技術に使う、産業廃棄物から低コストで鉄を得る工業技術として発展させることを提唱する、実にユニークな研究です。柔軟かつ実践的な若い発想力を評価して、審査部会特別賞を授与するものです。

本日受賞され皆さんはもちろんのこと、惜しくも受賞にいたらなかった他の高校についても、大変熱心な研究活動を行った生徒の皆さん、そして熱心にご指導された教員の皆様に、審査部会委員一同、心からの敬意を表明して審査講評といたします。